

縄文時代の海人

吉岡 郁夫[※]

はじめに

『三国志』魏志東夷伝の倭人の条は「魏志倭人伝」として、一般の人々の間にもよく知られている（以下「倭人伝」と記す）。そのなかに、倭の水人が黥面文身し、潜水して魚貝を採ることが記されている。これに関する論考はきわめて多くの研究者によって発表されている。

このような潜水漁を行っている人々は、日本では海士（男）または海女（女）と呼ばれている。これらの人々には、外耳道外骨腫（以下「外骨腫」と略す）という疾患が多発し、海人の職業病の一つとされている。これは骨性外耳道に限局性の骨増殖を生じ、外耳道が狭くなるものである。刺青は死後、皮膚が残らないので、古人骨からその存否を確かめることができないが、その人骨が「水人」であったかどうかは、頭骨の保存状態がよければ、それを推定ないし証明できることもあり得ると考えられる。ただ、外骨腫はダイバーのすべてに生じるものではないので、それが無いことは「水人」を否定するものではない。また、耳鼻科医以外の医師には、外骨腫を知らない人も少なくないし、人類学者でも本症に興味があれば人骨の報告で記載漏れになる可能性がある。

「倭人伝」に表れた水人は3世紀末の日本列島での見聞にもとづいて記されたと考えられる（和歌森1954、吉岡1994）。このような潜水漁法は東シナ海周辺に広く行われていたが（国分1975、大林1977）、その起源はどこまで遡ることができるだろうか。日本では、少なくとも縄文晩期まで遡ると推測されるが、出土人骨からそれを証明することはできないだろうか。幸いにも、縄文人骨は多数発見されていて、外骨腫があることも報告されているので、縄文時代の水人（以下「海人」と仮称）について考察したい。

外耳道外骨腫

まず、外骨腫についての説明から始めよう。その限局性のものは帽針頭大からくるみ大までの大きさがある。わが国の臨床報告例は小豆大から小指頭大までである。症例報告は普通より大きいために報告される例が少なくないので、平均的な大きさよりも大きいとみてよい。数は1個から3個以上までである。Hrdlicka（1935）はカリフォルニア頭蓋では、1個73.7%、2個17.5%、3個1.2%と報告している。

小さいものはまったく自覚症状がなく、まれに痒みを訴えるくらいであるが、大きくなると、難聴、疼痛、耳閉塞感、耳鳴などを訴えて医師を訪れる。まれに外骨腫の圧迫によって顔面神経

※愛知学院大学教養部教授

まひを来したり、壊された組織が化膿して激痛を訴えることがあるといわれている。外骨腫が外耳道炎、湿性耳垢、中耳炎などを伴うと、分泌物の排出が不十分になり、経過が悪くなる。この

表1 外耳道外骨腫の症状 (DiBartolomeo 1979)

症 状	%
聴力低下	40
急性耳感染	40
疼 痛	40
耳 鳴	30

ような症状で来院した患者に、たまたま外骨腫が発見されることがある。DiBartolomeo (1979) は外骨腫50例の臨床症状を表1のように示している。しかし、外骨腫は悪性腫瘍のように無制限に増殖するものではないので、重篤な症状を来すことはまれである。

初期の学説

人類学ではじめて外骨腫に注目したのは、Zschokke といわれている。彼はインカの古代ペルー人頭蓋に外骨腫が多いことを認めた。次いで、E. Seligmann (1864) や R. Virchow (1885) も古代ペルー人頭蓋に高率に外骨腫を認め、その原因が人工頭蓋変形にあると考えた。

その後、世界各地から人工頭蓋変形や外骨腫のある頭蓋があい次いで発見されるようになり、両者が併存しない例が多いことがわかり、この説は支持されなくなった。

一方、臨床医学では、それよりも早くから外骨腫の存在が知られていた。私の知る範囲では、すでに19世紀初頭から外骨腫に関する報告 (Autenrieth 1809) があるので、おそらくそれ以前から知られていたであろう。医師の眼に触れる外骨腫は、外耳道炎や中耳炎などで来院した患者に、偶然に発見されたものが多いことは、昔も今も変わらない。このような症例が積み重ねられていくに従い、外骨腫と外耳・中耳疾患との関係が考えられたのは、自然のなりゆきであった。痛風、慢性リウマチ、結核、梅毒などを合併した症例では、これらの疾患が誘因とみなされた。こうして、耳鼻科領域では、外骨腫の成因として炎症説が主張された。

外骨腫患者には、医師を訪れなかったものも多かったはずであるから、実際の頻度は報告された症例数よりもはるかに多かったであろう。炎症などを伴わない例を含めると、外骨腫は特定の地域に多いことがわかり、ときには家族性に発生することがあった。そこで、Schwartz (1885) は遺伝説を唱えたが、Bezold (1885) は、外骨腫は幼少児にはほとんど見られないので、必ずしも遺伝だけによるものではないと主張した。

また、外骨腫が主として思春期以後に見られることから、Politzer は骨性外耳道の発育中ないし化骨中に骨が増殖する、という発育異常説を唱えた。Wagenhäuser は骨折のあるところに仮骨が過剰に形成されて、外骨腫になることがあると説いた。鼓膜の周囲が癒着し化骨が増大したという説、良性腫瘍などの化骨によるという説もあった。

他方、Wyman (1874) や Field (1878) はすでに外骨腫と水泳との関係を示唆している。当時、この説はほとんど問題にされなかったのではないかと私は想像している。この Wyman はアメリカで E. S. Morse と共に貝塚を発掘した人物である。

このように、外骨腫は19世紀から、多くの研究者によって論じられてきたが、臨床医学と形質

人類学とはほとんど交流がなく、それぞれが別々の土俵で議論を闘わせていたのである。この傾向は20世紀に入ってから、しばらく続くことになり、日本では今でも変わらない。

わが国では、明治32年（1899）、佐藤の報告が外骨腫の最初の症例である。彼は中耳炎で来院した12歳の女兒の、左外耳道に小豆大の外骨腫を認めていた。第2・3例は寺田が明治38年（1905）に「巨大外聴道骨腫」として報告した2例である。彼は東京帝国大学耳鼻科外来で診察した1860例中4例（0.22%）しか外骨腫を認めなかった、と記している。

それ以来、昭和10年（1935）までに、猿渡・浜は臨床報告例14例を集めているが、昭和28年までに太田らが集めた文献例はわずか17例にすぎない。18年間にわずか3例しか追加されていないのは、たとえ太平洋戦争による研究の中断があったとしても、臨床家の外骨腫に対する関心の低さを思わずにはいられない。

人類学領域では、大正14年（1925）、長谷部が陸中大船渡湾付近の縄文時代の貝塚から出土した人骨に、外骨腫を認めたと報告している。その頻度は7例中6例という高率である。長谷部は外骨腫が太平洋沿岸に多く、しばしば家族性に現れるので、遺伝説を支持している。



図1 広島県南部の縄文貝塚（○印）
1 大田貝塚 2 津雲貝塚

次いで大正15年（1926）、清野は備後大田貝塚¹⁾を発掘して、多数の人骨を採集した。そのなかに外骨腫のあるものがあり、清野門下の三宅・今道（1931）によって発表された。それによると、外骨道の残る人骨35例中外骨腫は9例（25.7%）ときわめて高率に見出される。三宅らは外骨腫のあるものは一般に外耳孔の断面形が縦長であり、頭蓋変形は必須の発生条件ではないが、短頭では外耳孔が細長く、長頭では丸いことをあげて、外骨腫と頭型との関係を考えている。

冷水との関係

初期の研究では、これまで述べてきたように、多くの説が唱えられてきた。臨床医学では炎症説や発育異常説が有力とみられていたが、他方では外骨腫患者にしばしば水泳の習慣や既往歴が

あることも知られており、本症と水泳その他の水の刺激と関係が示唆されていた。

外骨腫の発症を、はじめて実験によって冷水での水泳としたのは Van Gilse (1938) である。彼は北海やバルト海の冷水で泳ぐ人たちに、しばしば外骨腫が見られることを認め、人体実験を行った。彼は12名の被験者の外耳道に15秒間、15℃の冷水を入れると、しばらくして外耳道の皮膚に紅斑と充血が生じ、それが45分間続くことを観察した。それに対して、40℃の暖水では、わずか1分間の充血しか見られなかった。その結果、彼は冷水が反覆して外耳道に入ることが原因で外骨腫を生じると考えた。

次に、動物実験で外骨腫ができることを示したのは、Fowler & Osmum (1951) である。彼らはモルモットの外耳道に19℃の冷水を注ぎ、外耳道の軟骨組織の線維化、硝子化と少量の骨新生が起こることを観察した。Adams (1951) は、外耳道の温度が体温以下の35°Fまで下がるのが、外骨腫のできる最も重要な要素としている。外骨腫のできる厳密な温度はまだ確定していないが、15~19℃ (59~66.2°F) の水温が外耳道に著しい変化を起こすことを、これらの実験は示している。

Fowler らはまた、外耳道の骨新生は冷水の作用する頻度と多少とも比例していることを見出した。つまり、冷水で泳ぐ回数が多いほど外骨腫はよく発達する、というのである。これは外骨腫が20歳以下、とくに15歳以下に非常にまれであることから支持される。

欧米で報告された外骨腫患者のうち、冷水で長期間水泳した既往例を持つものは高い比率で見られる(表2)。わが国でも、海女に外骨腫が高率に発症することが報告されている。野垣(1937)は能登輪島市の海女87名174耳の調査で、48耳27.6%に外骨腫を認めている。そのうち、19歳以下の32名64耳には本症がまったく認められないので、20歳以上ではさらに高率になるという。柴田(1953)は対島の日本人海女33名中10名、朝鮮人海女11名中4名、五嶋の海士5名中2名に外骨腫を認めている。また、柴田・山野辺(1953)は天草の海士20名全例に本症を認め、そのうち片側は2名のみで、他は両側性であったと報告している。

表2 外耳道外骨腫を有するスイマー
(Ascenzi & Balestreri による)

報告書	外骨腫	泳者
Van Gilse 1936, 1938	205	188
Hlaváčeck 1941	24	24
van den Wildenberg 1947	2	2
Adams 1949, 1951	28	28
Harrison 1951, 1962	60	60
Guerrier et al. 1966	17	14
Bremond et al. 1968	11	9
DiBartolomeo 1979	50	50

最近、Kennedy (1986) は世界各地の外骨腫についての報告を集め、その頻度と緯度との関係を調査している。それを見ると、ごく少数の例外はあるが、南緯・北緯0~30°および北緯45°以上の地方では、外骨腫の頻度は3.0~0%と低い。その頻度が最も高いのは南緯・北緯30~45°の中緯度で、海あるいは淡水の資源を利用して見られた。Kennedy はこのデータと、文献から得た臨床的および実験的データを併せて考察し、外骨腫と冷水資源との間には因果関係があり、とくに水泳や潜水と関係がある、と結論している。

腫と冷水資源との間には因果関係があり、とくに水泳や潜水と関係がある、と結論している。

一方、まれにはスイマーやダイバーでない人に外骨腫が起こることも事実である。このような少数の外骨腫は慢性炎症その他の刺激によって生じる、と考える研究者が多い (Van Gilse 1938, Fowler & Osmum 1942, Ascenzi & Balistreri 1975, DiBartolomeo 1979, Filipino et al. 1982)。

このように、外骨腫の主な成因は冷水刺激と考えられるが、これをまとめてみると、冷水、炎症、機械的刺激などで、外耳道の皮膚の血管が拡張して紅斑や充血を生じる。このような変化が骨膜に緊張増加をひき起こし、骨芽細胞を活性化して骨増殖が起こる、と考えられる。

(Belgraver 1938, Fowler & Osmum 1942, Harrison 1962, DiBartolomeo 1979)。

縄文人の外耳道外骨腫

外骨腫の説明にかなりの頁を費したのは、本症が一般にはあまり知られていないこともあるが、その成因が耳鼻科の教科書・専門書 (例えば沢木ら1981) には、いくつかの説があり不明と記されているからである。そして、本症の大多数が冷水刺激によって生じ、ダイバーの職業病とされていることを理解してもらうためである。従って、本症が高い頻度で見られるグループは長期間水泳・潜水を反覆して行ってきたと考えられ、それは潜水漁法を行う海人の集団とみられる。

外骨腫のある人骨は、前に述べたように、陸中大船渡湾付近の貝塚と、備後大田貝塚がよく知られている。前者は大船渡湾西南隅の細浦貝塚 (大船渡市末崎町細浦上の山) と東北隅にある大洞貝塚 (同市赤崎町) の2カ所である。細浦貝塚は縄文中期に営まれ、大正8年(1919)と14年(1925)、5体の人骨が出土した。外骨腫はそのうち4例に認められる。外骨腫のない1例は左側頭骨のみの骨片で、4例は両側に本症が認められている。大洞貝塚は後期と晩期の土器を出土し、4例中2例に外骨腫が見られる。これらの年齢、性別などは表3に示す。これらの頻度は9例中6例という高率である。細浦で発掘された人骨は30体を超えないから、4例以外に外骨腫がないと過程しても、約13%に達する。そして、全例が男性で、左右両側に発症している (長谷部1923, 1924)。

大田貝塚は尾道市高須大田にあり、大田川と呼ばれる小川の河口付近に位置する。標高は3 m前後であり、縄文後期前半の海岸線に接近して営まれている。大正15年(1926)、清野謙次らによって発掘調査が行われ、66例の人骨が出土した。それらのなかに多数の外骨腫が見出され、清野門下の三宅・今道 (1931) によって報告さ

表3 外骨腫のある縄文人骨 (1)
(陸中細浦貝塚・大洞貝塚 長谷部による)

人骨 No.	性	年齢	外骨腫	抜 歯
1 細浦 A 1	♂	熟 年	両 側	記載なし
2 〃 B 1	♂	壮 年	〃	—
3 〃 B 2	♂?	13,4才	〃	—
4 〃 B 3	♂	青 年	〃	—
5 大洞 1	♂	壮 年	〃	+
6 〃 2	♂	熟 年	〃	—

れている。三宅らによると、外耳道を有する頭骨は35例あり、18例は両側、17例は片側に外耳道が残っている。これらのうち、外骨腫は9例25.7%に認められ、総数66例に対する比率でも13.6%という高頻度である。これらの性別、年齢などは表4の通りである。これらはすべて男性、壮年

期以降で、両側外耳道のあるもの6例はすべて両側に外骨腫が見られる。抜歯は66例中わずか1例にのみ見られ、その後の資料を加えても、71例中2例にすぎない。

表4 外骨腫のある縄文人骨(2)
(備後大田貝塚 三宅・今道による)

人骨 No.	性	年 齢	外 骨 腫
1	♂	熟 年	両 側
2	♂	老 年	〃
3	♂	壮 年	〃
4	♂	熟 年	右(左欠)
5	♂	〃	両 側
6	♂	〃	〃
7	♂	壮 年	左(右欠)
8	♂	〃	右(左欠)
9	♂	〃	両 側

三宅らは、そのころまでに清野の収集した縄文人骨約900例のうち、備中津雲貝塚、備前粒江貝塚、河内国府遺跡、三河吉胡貝塚、遠江蜷塚貝塚、肥後阿高貝塚、肥後有喜六本松貝塚などの人骨には、外骨腫は1例も見られなかったと述べている。

清野(1959)はその後、三河亀山貝塚(渥美町)の人骨でも外骨腫のある人骨を収集している。この遺跡では、計測可能な頭骨14例のうち2例(♂壮年, ♀壮年)に外骨腫があり、♂と推定される骨片を含めて3例に外骨腫があると報告している。

縄文時代の漁撈集落

外骨腫を伴う縄文人骨はその他にもまだいくつかの事例があると思うが、それらがまとまって出土した遺跡は少ない。上にあげた例はほとんどが男性と推定され、女性と推定されたのは三河亀山貝塚の1例にすぎない。年齢も陸中細浦貝塚の2例を除いて、壮年以上に見出される。中耳炎・外耳道炎などの炎症性刺激による外骨腫の頻度はきわめて低く、片側性である。これほど高頻度に両側に発症するのは水泳や潜水などの冷水刺激によるとしか考えられない。

備後大田貝塚発掘の少し前、大正9年と10年(1921)、清野らは数回にわたって、備中笠岡市津雲貝塚の発掘調査を行っている。清野(1969)は津雲と大田の出土遺物や人骨の間に差があることに気づき、次のように述べている。

津雲貝塚と大田貝塚とは地理的に相距ること10里(約40km)に過ぎないのに拘らず風習上の差異が著しいのは時代差であるか、部落差である。風習差として著しいのは津雲貝塚に抜歯が盛んであるのに大田貝塚にこれを見ないこと、腰飾や貝製腕輪も津雲貝塚人が使用して居るに拘らず大田貝塚人はこれを使用しないこと等である。

清野は大田貝塚が津雲貝塚よりも古いことを、両者の習俗の異なる理由の可能性としてあげている。清野は、津雲では人骨がしばしば磨消縄文土器(後期前半)片と密接して現れると記しており、大田貝塚の土器にも同型式のものがかなり出土している²⁾。土器の型式からみると、両者の時代が重なる時期があり、時代差だけでは説明できないように思われる。

清野は習俗の違うもう一つの理由を、部落の差としている。清野は、また、

大田貝塚は北に山あり、南に瀬戸内海に面して大田貝塚は風光の佳い健康地らしく思われるのであるが、この地から出た古人骨には……種々の疾病、すなわち畸形性関節炎、外聴道骨

腫（外耳道外骨腫）等があるし、また顛顛術（穿頭術）が施された頭蓋骨が出たのは意外であった。

と述べている。それに対して、清野が津雲貝塚で収集した人骨は164体に及んでいるが、この中には外骨腫は1例も含まれていない。

津雲貝塚は縄文時代の貝塚に普通に見られるように、標高約10mの台地縁に位置している。大田貝塚も背後に台地を負っているが、貝塚は平地とっていいような緩やかな傾斜地に営まれ、標高は3mにすぎない。出土遺物も津雲貝塚には石鏃などの石器が多いのにひきかえ、大田貝塚では清野も指摘しているように、石器が少ない。このような事情に加えて、大田貝塚人にはダイバーの職業病である外骨腫が多発している。津雲貝塚人が狩猟と漁撈を生業としていたのに対して、大田貝塚人は魚撈とくに潜水漁を行う海人の集団であったと推定される。

清野の活躍した時代には、まだ縄文時代についての知見は現在とは比較にならないくらい乏しかったし、外骨腫の成因も明らかでなかったが、遺物や人骨から津雲と大田の習俗の違いを論じたことは、大いに評価されなければならない。

さて、外骨腫を伴う人骨のほとんどが男性であることは、男性の海士によって潜水漁が行われていたと考えられる。現代の海人の分布は香原（1960, 1963）によって、詳しい調査が行われている。それによると、海人は南では海士すなわち男性であり、北上するに従って、しだいに女性の海女にとって代るようになる。それは水温が低くなると、皮下脂肪の多い女性の方が有利になるからである。皮下脂肪は体温の低下を防ぐはたらきがあるので、脂肪が増えてくる中年の方が若い女性よりもすぐれた海女になるという。そして、8月の月別平均海女温が25℃線のあたりに、いわゆる海女どころが集中している。ところが、それより北へ行くと、ふたたび海士が多くなる。

南の海士は南シナ海、ポリネシアまで広く分布する本来の海士に属する。それに対して、北の海士は本業・副業の区別があいまいで、固定しておらず、その時々を経済的要因によって左右されるのだろうと推測している。これを縄文時代の海人に当てはめてみると、三河亀山に女性と推定される人骨があり、西南の備後大田と陸中大船渡に男性の集団があったことになる。

縄文後期・晩期の海水温はどうだったか。縄文時代には、陸上の気候が温暖化し、海面が上昇していわゆる縄文海進を来したことはよく知られている。海水温も上昇して暖海性のハイガイが日本近海で著しく増殖し、その北限は日本海側で秋田県とされている。津雲・大田貝塚ともハイガイが最も多いが、大船渡の貝塚ではアサリが最も多く、ハイガイは発見されていない。縄文後期以後はしだいに冷涼化に向かっていたが、まだ現在の海水温よりは高く、東北の海にも男性ダイバーの活躍する場があったと考える。

刺青習俗はあったか

「倭人伝」に記録されている習俗は弥生後期末の状態とされている。それには、男子は顔と体に刺青をして潜水し、魚貝を採ったとある。「倭人伝」の内容を疑う研究者は少なくないが、私は刺青などの習俗を記した条は実際の見聞記録にもとづいて編纂されたと考えている。

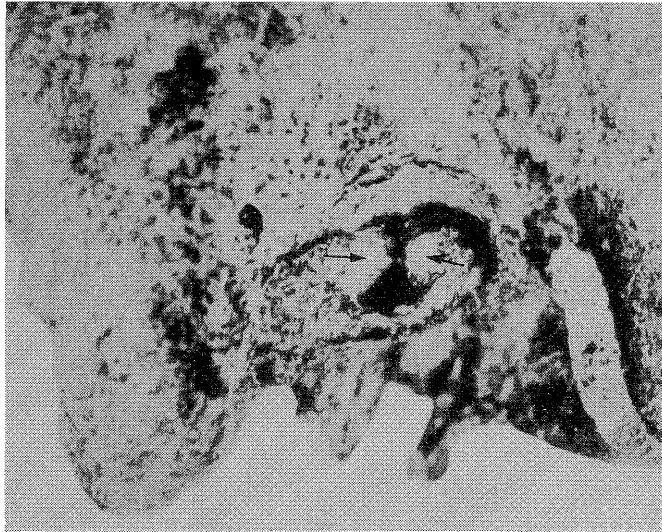


図2 外耳道外骨腫（右 矢印）
広島県大田貝塚（清野1959）

「倭人伝」の内容を考える際、和歌森（1954）は次のような注意が必要であるという。「倭人伝」には、編者がかなり深く知っていた範囲からあまりよく知らないが伝聞を知っていた範囲まで段階がある。「倭人伝」全体としてどれだけの史料価値があるかを定めることは困難であって、各部分について判断しなければならない。

また、そこに記された習俗は「倭」の習俗であって、それがどの地域を指しているかは明らかでない。北九州の海辺地域というのが無難かも知れないし、あるいは当時彼方で認められた限りの日本全体ということになるが、それがそのまま邪馬台国の習俗であるとはいえない。従って、この習俗がどの地方の習俗かを確かめれば、邪馬台国の所在がわかるという議論は成り立たないと。

この和歌森の指摘は「倭人伝」について議論するうえで重要である。これらのことを念頭において考えると、「倭人伝」の記事で注目されるのは、「其の地には牛・馬……無し」という記事である。弥生時代の日本に牛馬がいたことは、まったく疑いのない事実である。これは魏の使節が海人のムラを見て、そこで牛馬などを見かけなかったことをそのまま記したもので、日本全体についての見聞ではないと考えられる。それを見聞した場所は「会稽の東冶の東」にある北九州であろう。会稽は今の浙江省から江蘇省にわたる地方（越）、東冶は福建省閩侯県付近である（和田・石原1951）。越から見ると北九州は東北東に当るが、民俗方位とみれば不自然ではない。

当時の気候は中国の古記録などにより、2世紀後半から寒くなることが明らかにされている。これは日本でも認められ、花粉分析の結果、2世紀後半から3世紀にかけて気候が寒冷化し、弥生小海退と呼ばれる海岸線の変化が現れる。この気候の悪化した時代に倭国大乱が起こり、卑弥

乎が現れて邪馬台国ができていく（井関1983、安田1992）。

この時期に、男子のみが潜水するのは、倭のなかでも水温の比較的高い地方であろう。これらのことから考えると、魏の使節が刺青を見たのは北九州の一地域と思われ、また、この刺青習俗はその地域全体の習俗ではなく、海人の集落で行われたものであろう。

弥生時代に日本の一部で刺青が行われていた記録があるので、縄文時代後期以降も刺青が行われていたのではないかと、いう推測が可能になる。この時代の刺青の存在を証明する資料はないが、早くから土偶の顔面文様のなかに、刺青の文様を表現したものがあつたのではないかと、いう研究者が多い（江坂1960、1990、高山1969）。ダイバーのように身体を露出するのは、体に刺青を入れるのが普通である。もしそれを表現した土偶があるとすれば、顔面だけでなく身体の文様を強調したのではないだろうか。しかし、現在のところ、土偶が身体に刺青を表していると考えられる研究者は少なくない³⁾。

弥生時代には、土器、土製品などに描かれている人面文が刺青を表していると考えられているが（設楽1990、斎藤1992）、これと海人との関係は不明である。他方、縄文時代の土偶で刺青を表すと推定されるものは、中部以東の東日本から発見されている。それに対して、西日本では土偶の発見例が少なく、刺青を表現していると考えられる縄文土偶は見られない。

そこで、日本の周辺地域に眼を向けてみると、北はエスキモー、シベリア、アイヌ、南は琉球、台湾、呉越、雲南、古代ヴェトナムおよびラオス、ミクロネシアに至る広い地域に、かつて刺青習俗があり、近年まで存続していた地方も多い。これらのうち、シナ海をめぐる呉越、雲南の哀牢夷、古代ヴェトナムおよびラオスでは、水中事故を防ぐ目的で龍を刺青を施していたことが知られており、倭の水人の刺青もこれらシナ海をめぐる地域と同じ龍文身の系列と考えられている（鳥居1917、大林1968、金関1975、国分1976）。このような状況から判断すると、倭の水人につながると思われる縄文の海人に刺青習俗がないと考える方が、むしろ不自然であろう。厳密に言えば、否定も肯定もできないことはいうまでもない。

まとめ

縄文人の習俗で注目されるのは抜歯である。大田貝塚では抜歯の習俗がなく、清野らの得た66例中わずか1例⁴⁾にすぎない。（三宅・今道1931）。その後の資料を追加すると71例中2例に認められるのみである（春成1983）。それに対して、津雲貝塚では83例のうち、若年以上の個体で抜歯のないものはなく（宮本1925）、その他の例を合わせると、抜歯のある個体は109例に及んでいる（春成1983）。三河でも、亀山貝塚には外骨腫は多いが抜歯はなく、田原町吉胡貝塚（晩期）には、抜歯が多く外骨腫を見ない（清野1959）。

ここで、もう一度先学の意見を聞くことにしよう。大林（1968）は東アジアの刺青習俗を文身他界観の系列と龍文身の系列とに分けて考察している。文身的他界観というのは、刺青は他界観と密接な関係があり、死後の世界へ入るのに刺青を必要とする考え方である。大林は文身的他界観の系列は龍文身の系列より古いと推定し、その根拠として、前者は後者よりもはるかに広い地

域に分布し、僻地には近年まで島状に分布していたこと、龍文身の系列は前者の分布を断ち切るように、東アジアの中間に連続して広がっていることをあげている。

それに対して、国分(1976)は、台湾や琉球にも龍蛇の刺青があり、両者はあい伴う場合もあるのではないかという。さらに、国分は文身社会では抜歯も行ってたとみて、縄文人は少なくとも後晩期には、刺青も抜歯もしていたのではないかと述べている。

これらの仮説は広い民族学的視野に立って論じられており、魅力的で示唆に富んでいる。私もその大筋では賛成できる点が多いが、ミクロの視野で見ると、まだ解決しなければならない問題が少なくない。縄文人の間でも習俗を異にする複数の集団があり、海人の集団には抜歯の習俗はなかったが、おそらく刺青はしていたと思われる。そして、これらの集団で刺青がおこなわれていたとしても、それぞれのグループで刺青の目的・部位・文様が異なっていた可能性も考えられる。それらのうち、外耳道外骨腫を伴う縄文人骨が少ないことは、縄文人全体からみて、龍系列の刺青が少数派であった可能性も考えなければならないだろう。

注

- 1)清野は「太田」と記しているが、「大田」が正しい。以下すべて「大田貝塚」と記す。
- 2)大田貝塚の土器はあまり報告されていないが、昭和23年ごろ、筆者は広島県福山市の誠之館高校および松永小学校所蔵の遺物を観察した。
- 3)江坂(1960, P.310, 1990, P.156)は土偶体部の文様のなかにも、刺青を示すものがあるのではないかと述べている。
- 4)清野(9 1959, P.273)は2例と記している。

引用文献

- Adams, W. S.: The aetiology of swimmers' exostoses of the external auditory canals and of associated changes in hearing. "Journal of Laryngology and Otology" vol. 65, pp. 133~153, 232~250, 1951.
- Ascenzi, A. & Balistreri, P. : Aural exostoses in a Roman skull excavated at the "Baths of the swimmer" in the ancient town of Ostia. "Journal of Human Evolution" Vol. 4, pp. 579~584, 1975.
- DiBartolomeo, J. R. : Exostoses of the external auditory canal. "Annals of Otology, Rhinology and Laryngology" [Supplement] Vol 88, pp. 1~17, 1979.
- 江坂輝弥『土偶』300~315頁, 校倉書房, 1960.
- 『日本の土偶』152~156頁, 六興出版, 1990.
- Fowler, E. Jr. & Osmun, P. : New bone growth due to cold water in the ear. "Archives of Otolaryngology" Vol. 36, pp. 455~466, 1942.
- Harrison, D. F. N. : Exostosis of the external auditory exostoses and cold water : a latitudinal analysis. "American Journal of Physical Anthropology" Vol. 71, pp. 410~415, 1980.
- 春成秀爾「抜歯」『考古遺跡遺物地名表』(竹内理三他編), 423~429頁, 柏書房, 1983.

- 長谷部言人「石器時代人の外聴道骨瘤の見らるること」『人類学雑誌』39巻1号, 1～9頁, 1924。
「陸前気仙郡大船渡湾付近の石器時代人に外聴道骨瘤多し」同上40巻9号, 321～326頁, 1925。
- 金関文夫『発掘から推理する』138～142頁, 朝日新聞社, 1975 (『考古と古代』133～137頁, 法政大学出版社, 1982)。
- 井関弘太郎『沖積平野』92～106頁, 東京大学出版会, 1983。
- Kennedy, G. E. : The relationship between auditory exostoses and cold water. A latitudinal analysis. "American Journal of Physical Anthropology" Vol. 71, p. 401～415, 1986.
- 清野謙次『古代人骨の研究に基づく日本人種論』267～273頁, 岩波書店, 1959。
『日本貝塚の研究』34～47頁, 岩波書店, 1969。
- 香原志勢「人類学の立場からみた皮下脂肪の研究」『生物科学』12巻, 117～122頁, 1960。
「海女の分布の生態学的考察」『岡正雄教授還暦記念 民俗学ノート』, 平凡社, 1963 (『日本民俗文化資料集成』4巻, 191～209頁, 三一書房, 1990)。
- 国分直一「海上の道」『えとのす』2号, 1975 (『環シナ海民族文化考』66～82頁, 慶友社, 1976)。
- 三宅宗悦・今道四方爾「備後国大田貝塚人の外聴道骨腫に就て」『人類学雑誌』46巻11号, 709～718頁, 1931。
- 宮本博人「津雲貝塚人の抜歯風習に就て」同上40巻5号, 167～181頁, 1925。
- 野垣徳次郎「海女に見られたる聴器障碍に就て2」『耳鼻咽喉科臨床』34巻, 574～589頁, 1937。
- 大林太良「東亜・東南アジア・オセアニアの文身と他界観」『日本民族と南方文化』(金関丈夫博士古稀記念委員会編), 711～738頁, 平凡社, 1968。
『邪馬台国』10～14頁, 中央公論社, 1977。
- 太田文彦・一色信彦・浅島啓三「巨大なる側頭骨骨腫の一症例」『耳鼻咽喉科臨床』52巻, 1328～1331頁, 1953。
- 斎藤卓志「土偶・仮面にみられる刺青の問題」『衣生活と民具』(日本民具学会編), 59～74頁, 雄山閣出版, 1992。
- 猿渡二郎・浜 凱「アイヌ人頭蓋骨ニ於ケル外聴道骨増殖症ニ就テ」『大日本耳鼻咽喉科会報』41巻12号, 1677～1687頁, 1935。
- 沢木修二他編『臨床耳鼻咽喉科学』2耳科編, 2版, 173頁(小田 恂), 中外医学社, 1981。
- 柴田精郎「外耳道 Exostose の研究2」『日本耳鼻咽喉学会雑誌』56巻, 460～462頁, 1953。
- 柴田精郎・山野辺守幸, 同上1, 同上56巻, 366～369頁, 1953。
- 設楽博己「線刻人面土器とその周辺」『国立歴史民俗博物館研究報告』25集, 31～69頁, 1990。
- 高山 純『縄文人の入墨』, 143～150頁, 講談社, 1969。
- 寺田豊作「巨大ナル外聴道骨腫 付其手術ニヨリテ治癒シタルニ例」『大日本耳鼻咽喉科会報』11巻, 12～28頁, 1902。
- 鳥居龍蔵「倭人の文身と哀牢夷」『人類学雑誌』32巻7号, 185～191頁, 1917。

Van Gilse, P. H. G. :Des observations ulterieures sur la genèse des exostoses du conduit par l'irritation déau froide. "Acta Otolaryngologica". Vol. 26, pp. 343~352, 1938.

和田 清・石原道博編『魏志倭人伝・後漢書倭伝・宋書倭伝・隋書倭国伝』, 43~44頁, 岩波書店, 1951.

和歌森太郎「倭人の習俗—古代日本人の入墨について—」『邪馬台国』(古代史談話会編), 204~236頁, 朝倉書店, 1954.

安田喜憲『日本文化の風土』, 117~120頁, 朝倉書店, 1992.

吉岡郁夫「倭の水人」『名古屋民俗』48号掲載予定, 1994.

新刊紹介

佐野賢治編著

『星の信仰—妙見・虚空蔵—』

本書は、星の民俗(スターロア)を一貫して追跡して来た佐野賢治氏が、現在までの星の信仰と民俗に関する代表的な論考を集成した論文集である。洋の東西を越えて世界各地の星の民俗を比較する場合に、日本の事例と研究水準を、本書1冊で見渡すことが可能になった貴重な成果である。

本書は三章から構成される。第一章は、佐野氏自身が第二章(歴史)と第三章(民俗)に集められた各論文を研究史上に位置づけながら、星信仰の歴史を手際よくまとめたものである。日本においては民衆の間では星に対する信仰や行事はそれほど精緻なものとして発展することはなかったけれども、大陸からの天文学や各種の高度な方術が、宗教職能者によって民俗社会の中に持ち込まれ、そこに民俗の〈再構成〉と〈再生産〉が行われたという見方が本書を通底している一つの枠組みであり、本書に集められた20篇の論文はそれぞれこの枠組みに沿って、各テーマ・時代・地域の個別問題に切り込んだものと読み取ることができる。

一読してその多岐にわたる豊富な内容に驚かされるが、特に妙見信仰に関するものが多い。例えば、伊藤一男氏「中世の妙見信仰と祭祀組織—千葉氏の守護神と金剛授寺について—」、土屋賢泰氏「妙見信仰の千葉氏」、平瀬直樹氏「大

内氏の妙見信仰と興隆寺二月会」、安田宗生「熊本の妙見信仰」、田地春江「備後三原地方の妙見信仰」などである。この他にも妙見に論及する論文はすくなくない。16頁に述べられるように、中国の民間信仰では、この亀の上に立つ少年の姿の妙見なる神への信仰は知られていない。中国宗教を学んで来た私も、中国の資料にこの神を見出したことがなく、北辰からはむしろ玄武神、玄天上帝が政治的にも明代などで王朝から利用されて出てくるのが目立つ。日本中世の有力な家系の置かれた民俗の場と、中国的社会における民俗の場とは、北辰から派生した崇拜に、それぞれの社会の特色を刻印したようにも思われる。

寡聞にして中国では民俗レベルでの星崇拜を扱った専門書がないようである。アメリカの唐代文学研究家 Edward Shafer 氏の著作, "Pazing the Void: T'ang Approaches to the Stars" Univ. of Calif. Pr. 1977は唐代中国人の星の崇拜について書かれたすばらしいモノグラフで、翻訳が待たれる。佐野氏の編集によって日本の星の信仰の研究が見渡せるようになった以上、中文や欧文の業績をも追加して新しい比較の基礎を作ることも課題であろうと思う。

(丸山 宏)

1994. 9刊 A5判 510頁 溪水社12,400円